

紹介

石川県押野村史

押野村は昭和三十二年に金沢市と野々市町へ分村合併して消滅した村である。その旧押野村は、手取川扇状地北西部に位置する金沢市近郊農村で、したがって、この村は加賀平野早場米の産地であり、それを基本に蔬菜栽培と酪農をとり入れた近郊農業を行なっている。また村の東部の西金沢駅周辺は、戦後工場地帯と化しつつある。

歴史的には、中世富樫氏の本拠に近く、また一向一揆の舞台となつたところであり、近世にあつては、『耕稼春秋』を著した土屋又三郎の御供田村と同じ十村組に属していることからうかがわれるように、農業生産の比較的高度に発達した開けた村であった。また、村史編纂のための準備・調査過程で二つの縄文遺跡が発掘されている。

さて、この押野村史は、村の村史編集委員会と石川県の史学地理学関係の五つの学会による押野村調査委員会の共同によつて成つたもので、そのため、内容構成ははじ

め約三分の一の頁数を「第一部 押野村の歴史」として比較的簡略な通史に、後の三分の二を「第二部 押野村の調査」として調査・研究報告にあてている。本書の特徴は何よりも、この後者の存在にある。最近、『西宮市史』『布施市史』など、調査過程でパンフレットの報告を出しながら通史としての市町村史を編集する例をみるが、ここではそれが一冊の本に含められているのである。このため、一般住民は専門的で難解な論文の並んで村史を受取ることになるという、やはり欠点というべき点が指摘される反面、一つの村に集中して十数篇の報告・研究を得たことによる専門研究者の便宜は非常に大きい。

調査篇の内容を、ごく簡単にのべよう。まず地理篇は五つの論文よりなり、金崎肇氏は土壤・気候・地下水等の自然条件、斎藤外二氏は灌漑、矢ヶ崎孝雄氏は人口と集落、斎藤兎吉氏の近郊水田農業、飯内芳彦・柿本典昭両氏は工業について、それぞれ研究している。これらの地理篇では、とくに地下水と人文地理上の諸関係について多く触れており、かつ興味ぶかい。

民俗篇は、林のぼる氏の村の年中行事、長岡博男氏の虫送り、小倉学氏の富樫氏に

からまる稲荷信仰、今村充夫氏の婚姻・産育・葬制に、それぞれ関する四つの研究・報告。また歴史篇六論文は、辰巳明・橋本秀一郎両氏の加賀一向一揆、若林喜三郎氏の後藤家とその文書の解説、荒木澄子氏の初期十村制度、浅香山木氏の給人知行、清水隆久氏の初期本百姓、川良雄氏の古地図についての、各々の研究である。歴史篇は、史料の少ない加賀平野では貴重な旧十村後藤家文書が多く使用されているが、ただ近世中・後期の史料紹介・報告がほとんどないのは残念である。

考古篇は、高堀勝喜氏による縄文晩期前半の八日市新保・御経塚両遺跡発掘結果の報告である。

以上のような内容をもつた本書であるが、それが、昭和三十一年二年度の調査結果が、昭和三十九年に至つてようやく公刊されたのは、他ならぬ分村問題の紛争にまぎまされたからである。この書の成立自体が直面したこの問題について簡略な記述にとどめているのはおしい気もするが、解体分裂の後にもかかわらず刊行にまでこぎつけた関係者の努力の結実を祝福したい。(A5版七三三頁 昭和三十九年四月 石川県石川郡押野史編集委員会発行 非売品)

(高沢裕一)